

ボランティア通信

～神奈川中学校&港中学校～

生徒との関わりを通して成長した自分

英語英文学科4年 桜井 素雅

○目次○

【神奈川中学校】

英語英文学科 4年 桜井 素雅
人間科学科 4年 嶋 由加里
自治行政学科 4年 森 将嘉

【港中学校】

外国語学研究科 2年 佐藤 陽子

神奈川中学校でのボランティアを始めて2年が経ちました。個別支援級の生徒の学習の補助をしたり、時には生徒と一緒に活動をしてしています。

私は今期の目標に、「それぞれの生徒の個性をしっかりと捉え、生徒に合った声掛けや対応をする」と設定しました。この目標にした理由は、新入生3名の個性が多様であったことがあります。自分で何でもやる生徒がいる一方で、甘えたがりな生徒もいます。特に、新入生のM.Sさんは障がいによってコミュニケーションをうまくとることができません。私は以前、介護体験の特別支援学校での活動において、M.Sさんのように言葉を発することができなかつたり、歩行も支えがないと難しかったりする生徒の補助を行ったことがありました。その時はどうすればよいか全く分からず、職員の方の指示を仰いだり、手伝ってもらったりしながら、できる限りその生徒のサポートをさせていただきました。活動を終えた後も「あの時どうすればよかったのだろうか」などと悩みました。そして、今回M.Sさんと関わる中で介護体験での経験を思い出し、彼のために自分は何ができるか考え、積極的に関わっていこうと思いました。

ある日、お昼前の4限にM.Sさんは登校してきました。授業の前半は、校舎周辺を一緒に散歩し、後半は教室で自習のプリントを使い勉強をしました。私はその日の目標に「彼の表情や態度などから彼の気持ちを読み取ること」を意識することにしました。また、私からの指示を最低限にし、散歩の時は彼の気の向くままにさせ、勉強の時との切り替えを意識しました。さらに、彼の目線に立って見える景色や植物などに注目して声掛けをしてみました。散歩の時の彼の表情はすごく楽しそうにいました。散歩を終え、教室に戻ってくると、席に座ったものの、筆入れを出すまでに時間がかかってしまいました。しかし、いつもより勉強のペースが速く、途中で放り出すこともありませんでした。また、足を机に乗せたり、姿勢が崩れたりすることもなく、勉強に集中できていました。まだまだコミュニケーションが上手にとれないことのほうが多いですが、これからも彼と積極的に会話をしていきたいです。

活動も残りわずかとなり、個別支援級の生徒と先生方、さらに教育実習でもお世話になった神奈川中学校の教職員の皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。来年度から教壇に立つことになり、不安と期待の思いが半々の状態です。学校ボランティアや教育実習で学んだ貴重な体験を大いに生かし、生徒と成長し続ける教師になれるように精進していきます。



言葉のないコミュニケーション

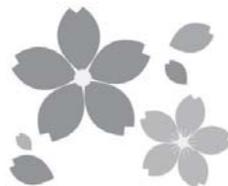
人間科学科4年 嶋 由加里

神奈川中学校の個別支援級(特別支援級)で、ATとして活動を始めてから3年が経ちました。3年前に個別支援級に在籍していた生徒はみな高校生になり、教室の様子は大きく変わっています。しかし、教室から生徒たちの元気な声が聞こえるところは、3年間ずっと変わっていません。個別支援級に在籍する生徒は、何らかの障がいを抱えている生徒たちです。個性豊かな生徒たちが集まっている教室では、みんなで楽しく遊んでいると思っても、ほんの些細なことから突然けんかが起きることがあります。自分の気持ちを抑えることが苦手な生徒や、自分の気持ちを伝えることが苦手な生徒がおり、先生方やボランティアの学生が間に入らなければ、仲直りができないこともしばしばあります。しかし、友達に嫌なことをされてしまっても、何も言えずにただ助けを求めていた生徒が「やめて」と友達に言えるようになったり、なかなか謝ることができなかった生徒が「ごめん」と言えるようになったりと、時間をかけて少しずつ生徒が成長している姿を見ることができています。

今年度入学してきた生徒の中に、M君という男子生徒がいます。M君はいつもにこにこして、教室では生徒たちにとってかわいい弟のような存在です。M君は言葉を発することが困難なため、自分の気持ちは表情や動作で表します。嬉しいときや楽しいときは、手足をバタバタさせて全身で表現します。また、先生方や他の生徒と挨拶を交わすときは、互いの手のひらを合わせます。そして、質問をされて肯定するときには手を挙げます。しかし、時々否定するときも手を挙げることもあり、言葉のないコミュニケーションの大変さを感じます。そこで、先生方がM君とどのように接しているのかを見てみると、カードにこれ

からやることを書いて一緒に確認し、やりたいことを聞くときには指さしでカードを選ぶことで意思疎通をはかるという方法を取っていました。今後M君と接する際には私も参考にし、M君との距離をもっと縮めたいと思います。

4年間の大学生活が終わろうとしており、学生生活も残すところわずかとなりました。1年生から始めた学校ボランティアを振り返ると、先輩方からアドバイスをもらいながら悩みを解決して活動していたのが、いつの間にか自分で解決できるようになり、さらには拙いながらも仲間へアドバイスをするまでに成長できました。週に1度の活動ではありますが、継続してきたことにより、自分の活動に自信を持てるようにもなりました。活動を通して、自分が大きく変わったように感じます。神奈川で学んだことを忘れずに、今後も生徒と関わっていきたいと思います。



生徒一人一人の個性と向き合う

自治行政学科4年 森 将嘉

神奈川中学校の個別学級でAT活動を始めて半年が過ぎました。学校全体の1日の流れや生徒たちとの接し方などにも慣れ、前期に比べて周囲の様子を見ることができるようになりました。その中で、個別学級の先生が朝の学活の「おはようございます」から帰りの学活の「さようなら」まで、常に生徒と一緒にいることに気がつきました。個別学級の先生方は自分の専門教科以外にも様々な教科を担当します。しかし、音楽や技術、英語などの個別学級以外の先生が授業を行う際も、生徒の隣に座り一緒に授業に参加し、授業の雰囲気作りや困っている生徒に対してサポートをしています。また、普通級で授業を一緒に受ける際も、廊下から個別学級の生徒の様子を観察し、困っている生徒へのサポートができる体制をとっています。なぜ、個別学級の先生方が常に生徒と一緒にいるのか考えると、個別学級の生徒は、それぞれ異なる課題や障がいを抱えて学校に来ているため、生徒一人一人の個性を捉え、目標にしていくことで指導を行うためであると思いました。

このように考える理由として、後期に入ってダウン症の生徒との関わりの中で感じました。この生徒とはじめて会ったとき、まだこの生徒に対して、どのような指導を行うか決まっていませんでした。その後、着替えをする際にどの程度自分でできるか、どのような支援をすればできるようになるかを試していきました。その結果、着替えについては、時間はかかりますが、ホックやチャックなどの細かい作業以外は、自分でできることがわかりました。この結果から指導方法として、コートや着替えについては、支援せずに一人で着替えを行うことになりました。また、平仮名の練習を行うときには、事前に教員がペンで下

書きを行いその上をなぞるようにして行っています。このような、生徒の個性や苦手を十分に把握し、それぞれの生徒の個性にあった学習指導や生活指導の方法や目標を決めたことによって、生徒自身も次に自分が何をすればよいか分かり、先生からの支持がなくても、自分から動こうとする様子が見られるようになりました。

このことから、生徒の一人一人の個性と向き合い、その生徒が本当に必要としていることは何かを把握し、目標設定や指導方法につなげる観察力・判断力・実践力が教員には大切になると再認識しました。



個別学習から一斉授業へ

外国語学研究所2年 佐藤陽子

横浜市中区に位置する港中学校は、全校生徒の4分の1が外国につながる生徒で、多くは中国出身です。現在約40名の生徒が国際教室で週2～4時間、日本語や不得手な教科を個別に学んでいます。また、生徒は外部の日本語教室にも通って、日本語の習得に向けて取り組んでいます。国際教室担当の先生は中国語を話すことができ、生徒との学習の他、生徒と他の先生方との間に入って通訳をすることもあります。また、中国語を母語とするサポーターの方が在籍していて、中国語を話すことができない先生方が生徒を担当する際に一緒に入って母語での支援を行っています。港中での国際教室での活動を通して、これまで活動してきた「のびのび楽習塾」では知ることのできなかった、学校内（国際教室）での外国につながる生徒への支援を学んでいます。

港中学校の国際教室に飛び込んで1年が経ちました。最初は先生方の指導を見させていただいたりサポートをしたりしていましたが、今年度からは生徒と一対一で学習する機会が多く、より近い距離で生徒と関わることができています。現在は夏休み明けに来日した生徒と日本語を学習していますが、どのように文法を扱い理解させるのか、毎回試行錯誤しています。のびのび楽習塾に通う子どもたちはコミュニケーションに問題がなく、教科学習につながる日本語を学んでいるため、コミュニケーションに必要な日本語指導は現在の港中での活動が初めてです。

使用している教科書はイラストが多く、直感で意味をとらえることは容易ですが、「おいしいです」「おいしくないです」「おいしかったです」「おいしくなかったです」のような文型の違いは難しく、イラストだけでは伝わりきらないことがあります。母語サポーターの方に説明していただくこともありますが、なるべく自力で伝える努力をしています。日本語やイラスト、ジェスチャーを駆使して伝えようとする私自身の姿を、サバイバルのコミュニケーションの一例として、生徒に見せる機会となるからです。生徒の母語である中国語を使うのは簡単ですが、少しでも彼らが日本語の力をつけるためには、できるだけたくさん日本語に触れることが必要です。なかなか意図が伝わらず時間がかかってしまうこともありますが、生の日本語をたくさん使い話すことがネイティブスピーカーである私が第一にできることだと思います。また、教科学習を行う生徒も見ていることから、教科学習において「日本語の壁」をどれだけ取り除くことができるかを考えるようになりました。専門である英語では、現在「授業は英語で行うこと」とされています。外国につながる生徒が増加し、生徒の母語が多様になっていることを踏まえると、教師が英語の授業で日本語を使わないことは生徒の学習にとって有益であることが多いと思います。個別学習において外国につながる生徒の得手不得手をとらえることで、どのように一斉授業を展開することが可能であるのかを考えていきたいです。

発行日:2016年2月27日

発行場所:神大ユース・サポート・プロジェクト(JYSP)

TEL: 045-481-5661(内線4352)

FAX:045-413-4154

E-mail: jysp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp

URL:<http://www.kanagawa-u.ac.jp/>

[teacher_training_course/jysp/](http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/)

